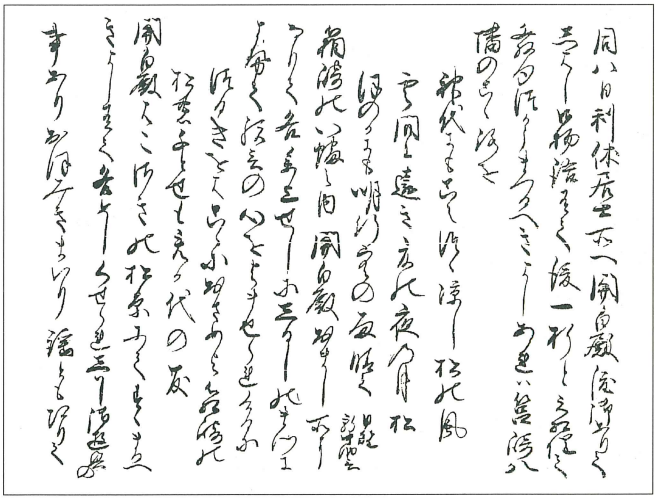
ISSN 0917-7604

東光原

熊本大学附属図書館報

Kumamoto Universiry Library Bulletin, No.16. February. 1997

- 鈴鹿本「今昔物語集」一見の記
- 熊本大学附属図書館寄託永青文庫の貴重書（四）
  細川幽斎『九州道の記』一巻
- コーディングマニュアル試作に携わって
  —総合目録データベース実務研修報告—
- 平成８年度漢籍整理長期研修報告
- 今世紀最後の図書館システム



同八日、利休居士所へ関白殿渡御ありて、しばし御物語有て後、一折と被相催て発句つかうまつるべきよしあれば、筥崎八幡のこゝろを

神代にもこえつゝ涼し松の風

雲間に遠き夏の夜の月　　松

ほのかにも明行空の雨晴て　日野新中納言

箱崎の八幡の内、関白殿おまし所になりて、各参上せしに、しるしのまつによせて祝言の心をよませられけるに、

つるぎをばこゝにおさめよ箱崎の

松の千とせも君が代の友

関白殿、はこざきの松原にてすゞまるべきよし有て、各めしぐせられ、しばし御遊興の事あり。おほみきまいり謡ども有て

［Ｉ］『九州道の記』天正15年６月８日の条。室町後期写。巻子本一巻。
外題・内題ともにないが、箱書に「幽斎公道記」とある。東京都・細川家永青文庫蔵。

鈴鹿本『今昔物語集』一見の記

森　正人

京都大学附属図書館から、平成８年度秋季展示会の案内をいただいた。思いもかけないことであったが、案内状に、鈴鹿本『今昔物語集』が平成８年６月に国宝の指定を受けたことを記念しての展示会であるよし記されていた。私が今昔物語集に関心を持つ一人であることを知ってくださったらしく、図書館と企画にあたられた方々のはからいによるものであった。

鈴鹿家より京大附属図書館に寄贈された今昔物語集の写本は、全二十八巻のうちの九巻九冊を残すのみであるが、書写年代が鎌倉中期と判定されて他の本にくらべて格段に古いばかりでなく、現存諸本の祖本であることが明らかになっている、特別の本である。1996年１月に刊行した新日本古典文学大系（岩波書店）の注釈では写真に拠るほかなく、いつかは一見しなければならないと思っていた。

展示期間中の11月15日㈮には、京都大学総合人間学部の西山良平助教授による「『今昔物語集』の〈構造〉と歴史学」と題する講演会も行われる。西山氏といえば、古代の王権と色好みの問題を日本史学の側から検討した意欲的な論文で、印象に残る方である。この講演も聴きたいと思った。折よく、翌16日には神戸女子大学で和漢比較文学会の例会も開かれる。多用な時期ではあったけれども、出かけようと思いたった。

京大の図書館には、講演の始まる少し前に着いた。受付で目録を受け取るのももどかしく、鈴鹿本の前に立った。写真から想像していたより紙は古びても見えず、墨色も鮮やかである。虫食いの多い本であるが、きれいに裏打ち補修が施されていた。鈴鹿本の書写・伝来という問題に焦点を合わせた展示になっていて、本の喉（綴じ穴から背までの部分の紙）に書き入れのなされている箇所が拡げてあった。その書き入れは本来は見えないのであるが、現状は綴じ紐（こより）をはずして装丁し直されているので、つぶさに見ることができる。書き入れは、はやく鈴鹿本を調査した江戸時代の学者伴信友によって発見され、昭和に入って酒井憲二氏がさらに子細に調査して、鈴鹿本の伝来ひいては今昔物語集そのものの成立の場と背景を解く鍵になるとして注意を喚起し、20年ほど前に研究者の関心を集め、活発な議論のなされたことがあった。

１時間半に及ぶ西山氏の講演は、鈴鹿本に関する新しい知見を示されたほか、刺激に満ちたものであった。国文学の側の研究成果を批判的に紹介し、あわせて、今昔物語集を史料として用いる歴史学者の立場と視点をも検証するというかたちで、今昔物語集の世界の問題性が面白くかつ鋭く語られた。

講演が終わって、展示室に多くの人が移動した。鈴鹿本の展示棚の周囲は一時人だかりがして、近づくことができない。そこで、先ほど見るいとまのなかった他の展示品を眺めることにした。清原家文庫の本が目についた。抄物のほかに、複製で知っている孝子伝などもあった。

閉室の30分前、人影がまばらになって、ようやく静かに鈴鹿本と向き合うことができた。卒業論文を書こうとして日本古典文学大系で今昔物語集を読みはじめた頃、その口絵に載せてある写真の数葉に何度か見入ったことがある。当時の私にとって、鈴鹿本ははるか遠いところにあった。その頃から20余年、この作品のために費やした多くの時間をしみじみと思った。しかし、この本が国宝ということになれば、今目の前にあっても、もっと遠いところに行ってしまったのかもしれないと思った。

先に述べたように、鈴鹿本には喉の部分に５箇所の書き入れがある。そのうちの４箇所は、総六丸という人物が一見した旨の書き付けで、本文とは別筆と認められる。鈴鹿本の本来の装丁は袋綴じで、料紙を二つ折りにして綴じられていたわけであるが、それらの書き入れは、すべて紙の左端すなわち二つ折りにされた紙の裏の端、綴じ穴の外側にある。巻第十二第42紙の「一見了　総六　十九」という書き入れの部分が拡げてあった。よく見ると、次の第43紙の表の右端の同じ高さのところに、つまり対称の位置に墨の痕がある。「十九」の裏文字のように見えるから、第42紙の文字が写ったのであろう。気づいて、私は軽い興奮をおぼえた。このことは、鈴鹿本が綴じられていない状態で書き入れがなされ、二つ折りの第42紙に二つ折りの第43紙が重ねられたという事情を物語っている。総六丸の「一見」書き入れは、点検作業の心覚えとして鈴鹿本が綴じられていない状態でなされたと、すでに酒井

憲二氏によって推定されていたが、これはその裏付けとなるであろう。

さらに、第42紙に眼をこらすと、「九」のすぐ下の位置にも墨が薄く付いている。第43紙の「九」の裏文字の一部と形がよく似ているから、第43紙の墨がまた第42紙に付着したのではなかろうか。そうであるなら、第43紙は第42紙に重ねられた直後に、ずらされたということになる。この想像が当たっていれば、書き入れが綴じられていない状態でなされたことの明徴となるのではないか。ただし、そのことは、鈴鹿本が綴じられる以前の段階であったことをただちに意味するものではない。綴じ糸が切れた状態、あるいははずされた状態であったかもしれない。

このような想像を楽しむ一方で、鈴鹿本の姿の些細な箇所に執着する自分に苦笑を禁じえなかった。これは、すべてガラス越しの観察にもとづく、粗い推測にすぎないではないか。鈴鹿本を手にとって調査された方々はすでに気づいていらっしゃるであろう。いずれにしても、綴じ穴の位置、書き入れの文字の位置と形、墨の汚れの位置と形とが計測・照合されて後、確かめられるべきことである。

こうして、私は感傷と愉快な興奮を自嘲に包んで展示会場をあとにした。その感情を整理する気にはなれなかったので、京都に行くと必ず酒を酌み交わすことにしている友人にも電話せず、大阪の宿に向かった。

（もり　まさと　文学部教授　国文学）

熊本大学附属図書館寄託 永青文庫の貴重書（四）

細川幽斎『九州道の記』一巻

荒　木　　尚

今年はＮＨＫの大河ドラマ「秀吉」にちなんだイベントが多かったという。そこで、今回は幽斎と秀吉との関係を追いながら資料をたどることにしたい。

天正13年（1585）４月、幽斎は秀吉から在洛料として、かつての所領地であった西岡勝竜寺一帯に三千石を与えられた。この13年ごろには、幽斎は秀吉の動向にあわせて行動することが多く（『兼見卿記』）、二人の間に親密な関係があったらしいことが知られる。秀吉は天正13年７月関白職につく頃から、文化に対する関心が強まったようである。14年には２月に、15年の末から翌16年にかけては、連続して連歌会を興行し、また出席している。そしてその連歌会の連衆のなかには、いつも幽斎が加わっているのである。文化的上昇を志向する関白秀吉にとって、幽斎はきわめて有用な存在であったにちがいない。幽斎は古今伝授の相伝者として当代歌壇の第一人者であり、その文事は文学領域のすべてに及んでいたから、そのような幽斎を側近く伺候させることによって、秀吉自身の文化的権威づけと満足感を充足させることになったと思われるからである。

天正15年の３月、秀吉は島津氏・大友氏の抗争をとどめるべく九州へ遠征した。幽斎の嫡男忠興（ただおき）らも従ったが、幽斎は無為の丹後在国を憚って、秀吉の出陣から１月余り遅れて海路出発した。その時の細川幽斎の紀行文が『九州道の記』であり、その善本（巻子本１巻）が永青文庫に所蔵されている。法体（ほったい）になった幽斎は、戦力として合戦に参加するわけでもなく、秀吉の陣中見舞くらいの悠長な下向であった。途中、名所旧跡に親しみ、俳諧即興の和歌・連歌を詠み、秀吉と同席しては風流韻事を楽しむ雰囲気が記されている。天正15年６月の記事を引いてみよう。→［Ｉ］

８日、陣中に供奉して福岡の姪浜（めいのはま）にいた千利休（1522～91）の宿所に秀吉がやってきて、連歌一折を所望し、幽斎が求められて発句（ほっく）を詠んだ。発句は当座の賓客が詠むもので、季語を具え、格調のある挨拶性が要件とされる。一座における幽斎の地位のほどが知られよう。幽斎は、箥崎（はこざき）八幡宮の標（しるし）の松に秀吉（松）を寓して、和平を実現させた功績を称える挨拶の句とした。季語は「涼し」で夏。続いて脇句を「松」（秀吉の一字名）が付け、日野中納言輝資が第三句を継いでいる。秀吉の在所となった八幡宮境内では、幽斎は請われて、標の松によせた祝言の心を詠進した。戦いをやめて剣をこの武神のもとに納めなさい、箱崎の千年の松もわが君の代の友であるから、と秀吉の戦勝をことほいでいる。

次の［Ⅱ］は、６月25日と27日の記事である。宗易（利休）からよこされた歌「あまざかる鄙（ひな）の…（都を離れた地方の住いと思うなかれ、どこも同じ浮世ではないか）」に返事して、幽斎は「あまざかるひなには…（都を離れた地方にはやはり居たくないよ、どこも同

じ浮世だけれども)」と応じた。幽斎が西国の生活を託(かこ)つことがあったらしく、それを利休が慰めたのに対し、やはり「ゐたむなき」(居とうない)とすねていて、二人の親しさがうかがえる。27日は、草花を活けて沢山の花瓶を用意した御座敷での当座の連歌会。ここでも幽斎は秀吉から発句を所望されて、「夏草に…」と詠み、意表を衝いて夏の草花を賞でる秀吉の風雅をよろこんだ。脇句は秀吉。発句の「たもと」を受けて、衣に夜半の月を映した。そして第三句は秀吉側近の連歌作者大村由己(ゆうこ)が付けている。

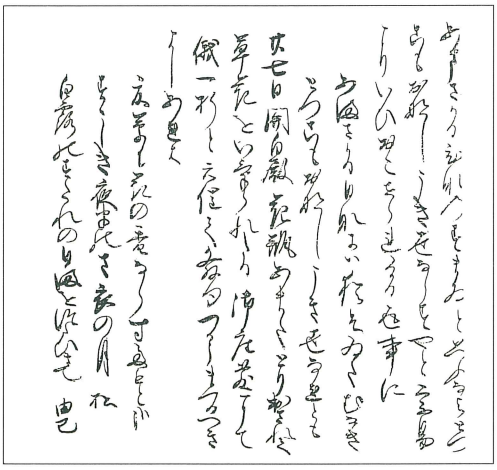
幽斎は、秀吉が主催した聚楽第の歌会や花見の歌会などにはその人数に加わっていて、代詠歌を詠むことも多かったようである。幽斎はやはり、秀吉の文事には欠かせない存在であった。加えて秀吉には、幽斎の諧謔嗜好が好もしく思われていたらしい。幽斎の狂歌や雑俳は『細川幽斎詠歌聞書』に収載され、また『古今夷曲集』『後撰夷曲集』や『醒睡笑』などにも載り、その中には秀吉と俳諧を楽しんだ記事がみえる。そこで『月刈藻集(つきにかるものしゅう)』に収める話を引いてみたい。

玄旨法印語テ云、秀吉連歌ヲ好ミ給シ比、或時御前紹巴ナド有合ケルトキ、太閤ノ連歌ニイヅレノ句ニテアリケン、「宇治川ニ花舟ナガス」トアソバサレタリ。サテ人ニ問給フハ、カヽル川ニモ花ハ有コトニヤト尋タマヒケルトキ、イヅレモ古キ証歌モ覚ヘズ。ナントモ申ス人侍ラザリケルニ、玄旨イハレケルハ、撰集ハ覚ヘズ、証歌ハ候ト。人々ウチ案ジタリケルニ思ヒヨラズ。何ト申ス歌ゾト問ヒケルニ、

水上ハ桜谷ニヤツヾクラン花舟ナガス宇治ノ川長(カハヲサ)

ト云ヘル歌アリト申サレケルニ、太閤コトニ御喜悦アツテ事スミタリ。其後紹巴、玄旨ニ会セシトキ、桜谷ノ歌イロイロ考ヘ侍レド、イヅレノ内ニモアラズ。若シクハ思ヒタリ給フニヤト尋タリシニ、玄旨、サレバコソ。ソレハ上ノ首尾アハスルマデニテ、即席ノ愚ナレバ何ニカハ侍ラント申サレタリケルニゾ。

(私意により改めたところがある)



あまざかるひなのすまゐと思ふなよどつこもおなじうき世ならずや、と宗易よりいひおこせられける返事に、
あまざかるひなには猶ぞゐたむなき
どつこもおなじうき世なれども
廿七日、関白殿花瓶あまたとり出されて草花をいけられたる御座敷にて、俄一折と被催て、発句つかうまつるべきよしあれば、
夏草に花の香ならすたもと哉
すゞしき夜半のさ衣の月　松
白露のすだれのひまをつたひきて　由己

［Ⅱ］『九州道の記』天正15年6月26日・27日の条。

秀吉の発句には疑点があったが、幽斎が即詠でありもしない証歌を詠み出して、その場をうまく納めた。後日、紹巴が幽斎の処世に、感心することになっているが、同類の説話はほかにも多く伝えられている。連歌に限らず当時の文芸は、詩に奉仕するとともに座の人間関係にも機能していた。秀吉が文事に期待していたものを理解して、見事に対応したのが細川幽斎であった。

(あらき　ひさし　文学部教授　国文学)

本学教官寄贈著書紹介

金原　理 教授(文・比較文学)
平安朝漢詩文の研究
金原　理著
九州大学出版会　1981.10

上利政彦 教授(文・英語学)
Formula, Rhetoric and the Word
Studies in Milton's Epic Style by Masahiko Agari
PETER LANG　1996

坂田正治 教授(文・独文学)
クロプシュトックの抒情詩研究
坂田正治著
近代文芸社　1996.7

松本寿三郎 教授(文・国史学)
熊本藩侍帳集成
松本寿三郎編
細川藩政史研究会　1996.5

中本　環 教授(教・国文学)
日本古典文学における愛のかたち
中本　環著
ＫＴＣ中央出版　1994.10

宮本光雄 教授(教・社会科教育)
生活科の理論と実践
授業づくりから評価活動まで
宮本光雄編著
東洋館出版社　1991.9

社会科の基礎・基本と意欲的な追究活動
宮本光雄編著
東洋館出版社　1992.4

生活科と社会科の接続・発展
その理論と実際
宮本光雄編著
東洋館出版社　1996.12

首藤基澄教授(養・文学)
句集　火芯(かしん)
平成俳句叢書Ⅲ
未来図叢書第六六篇
首藤基澄著
東京四季出版　1996.6

福永武彦・魂の音楽
首藤基澄著
おうふう　1996.10

コーディングマニュアル試作に携わって
―総合目録データベース実務研修報告―

中　尾　康　朗

学術情報センター主催による平成8年度第2回総合目録データベース実務研修（1996.11.11～1996.11.29）に参加した。私の所属した班では、「コーディングマニュアルの検討－現在未完である雑誌のコーディングマニュアル（記述ブロック）について、試作を行う（特に事例集を中心として）」という課題を与えられ、共同討議した。

現在NACSIS－CATの洋雑誌記述ブロックの部分については未完のままであり、作成が急がれている。班としても実務に使用できるようなものの完成を目指し、研修期間の大半はこのコーディングマニュアルの試作に費やされた。まずAACR2、AACR2Rをはじめとする関係資料の分析、項目の抽出、整理を行い、現行のコーディングマニュアルの書式を模倣する形で作成を試みた。私は最終発表をさせていただいたが、その際、主として試作品のプレゼンテーションに終始した。普段必要なときだけ引っ張り出してきて何気なく眺めているコーディングマニュアルであるが、実際に作成してみると読んでいるだけでは気づかないいろいろなことがわかってきた。そして私の興味は雑誌の記述ブロックから次第にコーディングマニュアルそのものへと移っていった。それらのことについては「コーディングマニュアル再考」と称して研修終了後のレポートにまとめている。以下はその抄録である。

現在コーディングマニュアルは総合目録データベースを形成するための「目録情報の基準」、その適用細則という位置づけにある。[1] そもそも総合目録データベース形成の目的が、

①書誌情報の共有を行い、大学図書館等における目録業務の負担を軽減すること

②形成された目録所在情報によって、資料の共用を促進すること

にあること[2] から、私はコーディングマニュアルの存在する目的もまた、それによって大学図書館等の目録作成業務の負担を軽くすることにあると考えた。

そのためには、必要な箇所をすばやくかつもれなく見つけることができ、文章が簡潔、平明であることが要求される。また、大学図書館等の目録作成の現状を考えると、目録規則をあまり知らなくても利用できるように想定して作成することも大切であると考えた。

以下、各視点からいくつかの工夫を考えていった。

表現について

現行のコーディングマニュアルは追加作成されてきたものだから細かい部分について必ずしも統一がとれていない。

①文

短く簡潔な文で書いていく。

②箇条書き

複数の内容を盛り込んである部分や、場合分けが必要な部分は箇条書きを活用する。

③用語

一般の日本語と異なった意味で使われている用語や、重要な意味を定義してある語は「　」をつけるなどして、表現上目立たせる工夫が必要である。

④見出し

各項目に見出しをつける。

構成について

各フィールド説明部分のうち類似したものはまとめたり、隣接してならべたりして、使いやすくする。

その他の工夫

①用語集の作成

基本的な用語集を作成する。

②索引の作成

「目録情報の基準」も含め索引の作成が急がれる。

③ビジュアル化

「記述文法」の図のように、ビジュアルをその他の部分にも補助的に使うのは有効である。

オンラインマニュアルについて

①リンク機能の充実

各用語、項目間の有機的な連携

各項目から情報源へのリンク機能の作成

情報源データベースを新たに作成して各項目とリンクさせる。

質問書データベースとのリンク

各項目に関連する質問書があれば、現在稼働中の質問書データベースへリンクさせる。

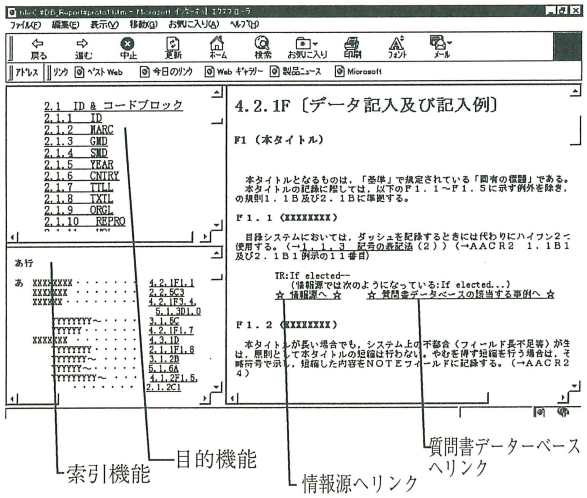
②フレーム機能への対応

目次部分をフレーム化する。

索引を作成してフレーム化する。

③新CATシステムとの連携

HELP機能として連携させる。



イメージ例

参考文献：

(1) 学術情報センター．目録システム利用マニュアル データベース編改訂版－目録情報の基準第２版 p.3

(2) 同　上 v

また、研修期間中その他の共同討議事項は次の通りであった。

「新CATクライアントシステムの機能－平成９年４月からの運用が予定されている新CATシステムの、クライアント側のシステムが備えるべき機能について検討を行う。」

「和洋区分の廃止－和図書／洋図書、和雑誌／洋雑誌の区分の廃止を前提として、そのために解決すべき問題等について検討を行う。」

最後に、この研修によって関心を同じくする仲間と知り合えたことは私にとって大きな財産となった。研修課の方々をはじめ関係者の皆様にはこの場を借りてお礼を述べたい。

（なかお　やすろう　医学部分館整理係）

平成８年度 漢籍整理長期研修報告

伊　波　ひとみ

東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター主催による“平成８年度漢籍整理長期研修”が、７月１日から10月23日までの４ヶ月間にわたり実施されました。

この研修の目的は、大学図書館，公共図書館，その他の図書施設において、漢籍整理の実務を担当している者に対し、研究・実地両面にわたり個別指導を行い、漢籍整理の取り扱いに関する技術を習得させ、学術資料としての漢籍の有効な利用を図ることにあります。

研修は、前期と後期にわかれており、前期２週間（７月１日から７月12日）と後期10日間（10月14日から10月23日）は東洋学文献センターにおいて講義・実習等が行われ、７月15日から10月11日は所属図書館での漢籍整理及び研究を目的とした自習期間に充てられていました。

講義の内容は、漢籍目録学概説、四部分類について、四角号碼検字法、漢籍目録整理法、和刻本整理法、漢字の字形変遷、朝鮮本について、中国図書目録とデータベースについて等々、幅広くかつ密度の濃い講義でした。その他に実習や見学があり、楽しみながら学ぶことができました。実習では、漢籍目録の基になるデータシートを作成したり、宮内庁書陵部の横山先生の指導の下、漢籍の補修（虫損直し、袋綴じなど）を行いました。また、内閣文庫、東洋文庫の見学では書庫の中まで案内していただき、資料の保管方法の点でも大変参考になりました。その他、全国の図書館機関から参加された研修生11名の方々と交流できたことも有意義なものになりました。

最後に、講義担当の諸先生方をはじめ、研修期間を通して終始お世話になりました東文研および文献センターの皆様、そして研修生の皆様に、この紙上をお借りして心からお礼申し上げます。

（いは　ひとみ　情報管理課目録係）

第13回 特殊資料展　－絵図でみる細川氏の領国支配－

中央館では11月２日(土)から４日(月)までの３日間大学祭である《熊粋祭》の日程にあわせて、『第13回特殊資料展』を自由閲覧室において開催しました。今回は「絵図でみる細川氏の領国支配」をテーマに、財団法人永青文庫が所蔵し附属図書館に寄託の資料の中から、「慶長国絵図」「元禄国絵図」を中心に絵図25点を展示しましたが、見てわかりやすいということで参観者に大変好評で、開催期間中学内外から３２０名の参観者で賑わいました。

また、初日の11月２日(土)には図書館会議室において、文学部松本寿三郎教授による公開講演会が行われました。この講演は、足利から徳川政権下にいたる各時代に、細川氏が大名領国を形成していく過程を展示絵図の解説を中心に行われましたが、テレビ放送中の「秀吉」と相まって43名の聴衆は興味深く聴き入りました。

（情報サービス課）

ネットワーク対応ＣＤ－ＲＯＭ追加のお知らせ

附属図書館では、ＣＤ－ＲＯＭサーバで現在、数種類のデータベースの利用をサービスしておりますが、このほど次のデータベースを追加してサービスできるようになりました。

１．科学技術文献速報　1996－

（ＮＴサーバで提供し、Windows OS パソコンで利用可能です。）

科学技術事業団が作成している科学技術に関する日本最大のデータベースで、これまでオンライン情報検索システムではJOIS、冊子体では科学技術文献速報として親しまれているものです。今回、利用できる分野は次のものです。（分野毎の利用となります）

（エネルギー編）
（ライフサイエンス編）
（金属工学、鉱山工学、地球科学編）
（電気工学編）
（土木、建築工学編）
（機械工学編）
（物理、応用物理編）
（環境公害編）

２．ＥＲＩＣ（教育学関連データベース)1966-Current

（ＯＶＩＤサーバで提供します）

米国の教育資料情報センターが作成する、教育学関係データベースです。

＊１．につきましては、1www@kumamoto-u.ac.jp もしくは図書館参考係（内線 2227）まで申し込み下さい。

＊２．につきましては、利用申請書用紙を図書館参考係、各分館に用意しておりますのでそちらにお問い合せ下さい。

なお、現在サービス中のネットワーク対応ＣＤ－ＲＯＭは次のとおりです。

・戦後50年朝日新聞見出しデータベース
・Oxford English Dictionary

以上２点につきましては、利用の申し込みは、＊１と同様にお願いします。

・Medline 1966-Current
・Chemical Abstracts 1996-Current

こちらの２点につきましては、利用の申し込みは、＊２と同様にお願いします。

（情報サービス課　参 考 係）

今世紀最後の図書館システム

甲　斐　重　武

少々世紀末的でオーバーなタイトルですが、この2月、附属図書館では電子計算機システムを更新しました。この新システムが向こう4年間、すなわち2001年1月までわが図書館の中心的な業務処理を行うことになります。新システムは、これまでの汎用機によるシステムから、今世紀最後を飾るにふさわしくUNIXベースのクライアント・サーバ方式のシステムとなっています。

そこで、この新しいシステムのハードやソフトの概要、および予定しているサービスの改善事項等について簡単にご紹介します。

システム構成

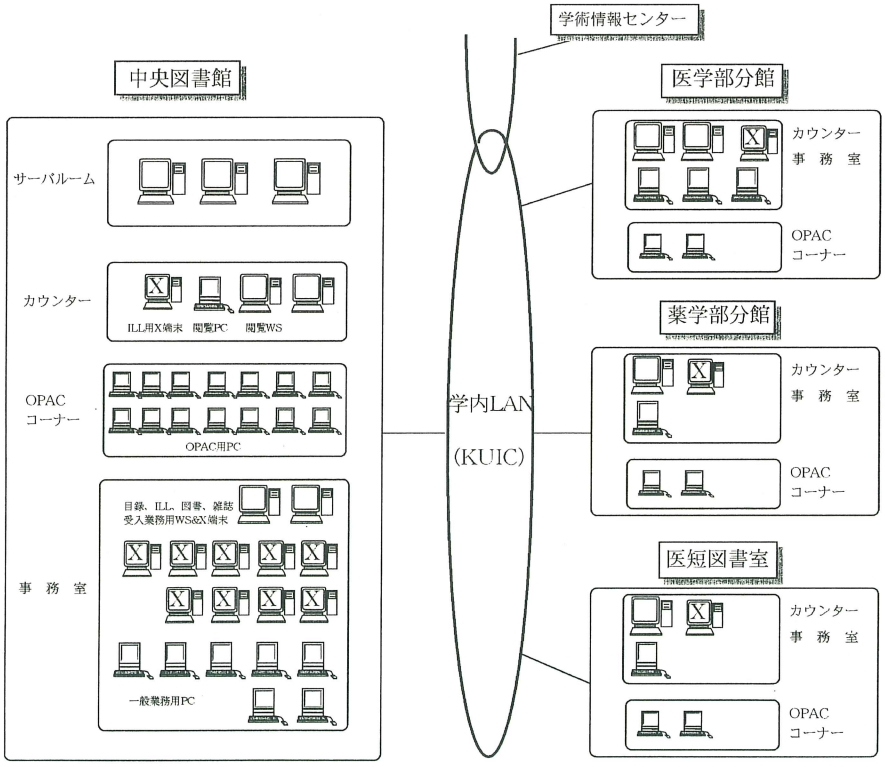
システム構成図は下の通りです。サーバシステムはUNIXサーバS-4／20H Model 150MPを中心とし、クライアントには閲覧・目録ワークステーション、目録用X端末、業務用パソコン、OPAC用パソコンといった多様なラインアップを揃えています。

また、中央図書館、医学部分館、薬学部分館、医短図書室の分散型のシステム構成で、各サイト間は学内LAN（KUIC）で結合し、さらに、SINET（学術情報センター・インターネット・バックボーン）を通じて学術情報センターはじめ学外機関とのインターネット接続も実現しています。

ソフトウェア

今回採用した大学図書館向けパッケージILIS／X-WR（富士通）は、図書館業務の主要なものを全て機械処理できるトータルパッケージです。図書館では、これまで機械化処理が完成していなかった発注・受入、予算管理、雑誌の業務を含め、トータルシステムの完成を目指します。

なお、ソフトウェアに関しては、なるべくパッケージの標準機能を適用することにし、本学独自の機能を新たに追加開発することは最小限にしています。ILIS／X-WRは、近隣の国立大学をはじめ既に幾つかの機関で導入されている実績あるソフトなので、むしろその標準機能を本学の業務に適用することにしています。



新システム機器構成

ILIS／X-WRにない機能で、サービス上不可欠な機能については、ILIS／X-WRによって構築されるデータを図書館員がワークステーションやパソコン・ワープロ等を使って検索・加工して処理することにしています。

サービス改善

新システムの導入を機に、これまで以上にサービスの改善を進めたいと考えていますが、改善内容の詳細や新しい改善事項については今後、この図書館報や図書館のホームページを通じてご案内いたします。

OPAC（オンライン目録：右図）は、和図書で正式書名がわからなくても書名中の単語で検索できる（これまではヨミだけ単語検索ができていました）など機能強化を行っています。また、OPACは単に蔵書検索だけでなく、利用者自身による貸出情報の確認や、予約・発注、電子メールなど利用者と図書館との総合的なコミュニケーション手段として活用する予定です。図書館側の体制が整い次第運用していく予定です。

また、図書館業務の大きな目標の一つに、資料の迅速処理があります。この点については、図書の場合、発注・受入・支払・目録の一連の業務を機械化によって効率化したり、雑誌においては、自動チェックインシステムによって受付から提供に要する時間の短縮化を図る予定です。

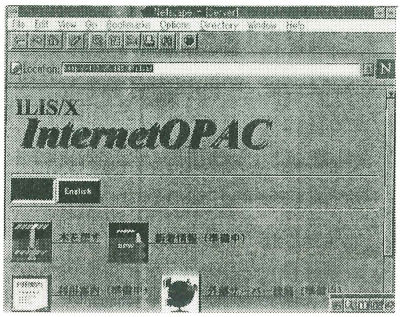
なお、ILIS／X-WRの標準機能にはないものですが、本学独自で開発運用するものとして、学内の図書資料室の事務の便宜を図るための業務用OPACの提供と、研究者・資料室に対して購入図書や新着雑誌の納入状況、他大学等に依頼した複写物等の料金・到着状況などを電子メールで連絡する個人メールサービスを計画しています。

4年後、21世紀になって間もない時に、図書館には次回の更新によって最新機能を搭載したシステムが導入されていることでしょう。今から期待が膨らむところですが、かといって今回の新システムで対応困難なニーズは4年間待って頂くという訳ではありません。向こう4年間に起きるであろう様々なご要望に対して、今回の新システムや学術情報提供システムやホームページ等図書館で保有するその他のシステムを有機的に結合させながら、その時々の最善の方策で対応していきたいと考えています。

（かい　しげたけ　情報管理課目録係長）

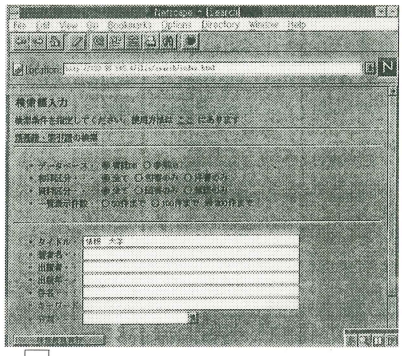
OPAC初期画面

附属図書館のホームページからもリンクされています



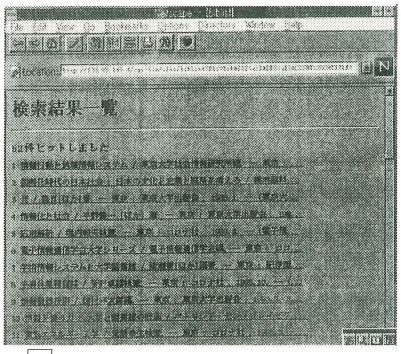
検索語入力画面

検索語を入力して「検索処理実行」ボタンをクリック



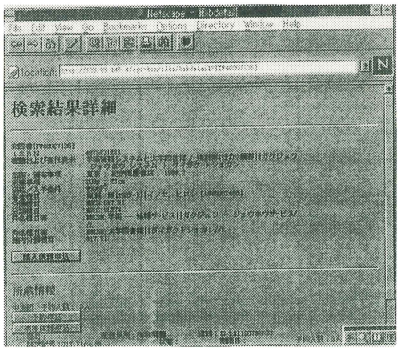
検索結果一覧画面

該当図書の一覧表示から目的のものを選択



検索結果詳細画面

詳しい情報、貸出情報が表示される



OPAC（オンライン目録）の利用例

人事異動

平成８.10.１　情報管理課総務係総務主任
田　尻　峰　郷
（熊本電波工業高等専門学校学生課
学生主任）

お知らせ

中央館では、語学研修用や洋画のビデオ・ＬＤ等、学習用やレクレーション用の資料を館内視聴に限って貸出していますが、毎日多数の方に利用され好評を頂いております。この度、新たに以下の作品を受入れましたので、是非ご利用下さい。

美術全集・国宝（全20巻）
世界の車窓から（全26巻）
新日本紀行（全30巻）
スポーツトレーニング（全30巻）
他洋画ビデオ23本

ご利用される際は、閲覧カウンターにてお気軽にお申し込み下さい。

また、利用者として推薦したい作品等がありましたら、是非リクエストをお願いします。すぐには購入できませんが、次期購入の際に活用させて頂きます。

東光原　№15の表紙目次に誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

誤）伝藤原定家筆『詠歌大概抄・秀哥大畧抄』と『歌合類聚』
正）『詠歌大概抄・秀哥大畧抄』と『歌合類聚』

日誌（平成8.9.1～12.27）

9．5　平成８年度九州地区国立大学図書館協議会
～６　実務者連絡会議（於長崎）
9.10　図書館委員会
9.17　古典籍研修会
9.27　附属図書館係長会議
10．1　古典籍研修会
10.15　古典籍研修会
10.21　九州地区国立大学附属図書館情報管理課長
～22　会議（本学開催）
10.31　附属図書館係長会議
11．2　第13回熊本大学附属図書館特殊資料展
～４
11．5　古典籍研修会
11.10　平成８年度大学図書館職員講習会
（於京都）
11.10　平成８年度第２回総合目録データベース
～29　実務研修会（学術情報センター）
11.14　図書館委員会
11.15　日本薬学図書館協議会九州地区会議
～16　（於鳥栖）
11.19　古典籍研修会
11.22　地区事務部課長会議
11.26　国立大学図書館協議会シンポジウム
～28　（於名古屋）
12．3　古典籍研修会
12.10　附属図書館係長会議
12.17　古典籍研修会
12.19　図書館委員会
〃　附属図書館係長会議

編集後記：２月に入り、新システム導入や集密書架の設置工事等で図書館内は慌しい毎日です。

本誌では、13号より４回シリーズで掲載いただきました文学部荒木教授の当館寄託、永青文庫所蔵資料の解説が今回で終了いたしました。教授には、ご多忙中のところ本当にありがとうございました。

次回からの、新企画にご期待ください。

熊本大学附属図書館報「東光原」（とうこうげん）※
第16号（Vol.６　№１）　平成９年２月発行
発行所　熊本大学附属図書館
〒860　熊本市黒髪 2-40-1
TEL 096(342)2273　FAX 096(345)9087
HP　http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp
編　集　飯田典子・成田和則・中尾康朗・伊波ひとみ

※　現在の中央館の敷地一帯が、旧制第五高等学校時代東光原と称する運動場であったことに由来する。